氏　　名	森　好紳
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　８４４０　号
学位授与年月日	平成　３０年　３月　２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	Constructing Mental Representations of Textual Topic Structure Among Japanese EFL Readers （日本人英語学習者の読解におけるトピック構造表象の構築）

主　　査	筑波大学　教授	博士（言語学）	卯城　祐司
副　　査	筑波大学　教授		磐崎　弘貞
副　　査	筑波大学　教授		久保田　章
副　　査	東京外国語大学大学院　総合国際学研究院　教授	Ph.D.（言語学）	根岸　雅史

論　文　の　要　旨

本論文は日本人英語学習者による説明文の読解を対象として、文章全体を包括する major topic と各パラグラフを包括する subtopic の階層的なつながり (トピック構造) を理解するメカニズムを検証したものである。読解において、読み手は個々の単語や文を超えて、文章全体を通して首尾一貫した理解を構築することが求められる。説明文の場合、文章で記述されるトピックを個々に理解するだけではなく、互いに結びつけて理解することが重要になる。先行研究では、主に大学生の英語母語話者が読解中にトピック構造を理解し、読解後のテキスト記憶に表象することが実証されている。一方、英語を第二言語や外国語として学習する読み手に関しては、パラグラフを超えてテキスト情報のつながりを理解することの困難性が指摘されている。しかし、英語学習者の検証は英語母語話者に比べて少なく、困難性の詳細な原因やそれに対する教育的介入の効果は十分に明らかにされていない。そこで、本論文では 2 つの研究を行い、研究 1 では英語学習者がトピック構造を理解するメカニズム、研究 2 では教育的介入の効果を明らかにすることを目的とした。

研究 1 は 3 つの実験 (実験 1, 2A, 2B) から構成され、英語学習者が major topic と subtopic のつながり (トピック構造) を理解するのかを、subtopic と詳細情報のつながりに対する理解と比較しながら検証した。実験 1 では、読解後のテキスト記憶を検証するため、major topic, subtopic, 詳細情報から構成される説明文の読解後に筆記再生課題を行った。(a) 手がかりとして major topic や (b) 詳細情報が提示される条件と、(c) 手がかりなしの統制条件で subtopic 再生率を比較したところ、英語学習者が subtopic を major topic や詳細情報と結び付けてテキスト記憶に表象し、特に前者の記憶が頑健であることが示された。実験 2A では読解中にトピック構造を理解するプロセスを検証するため、各テキストの読解直後に (a) major topic、(b) 詳細情報、(c) 非明示情報 (統制条件) をプライミング刺激として、目標語 (subtopic) に対する再認課題を行った。結果を条件間で比

較したところ、正反応率は subtopic が major topic や詳細情報と結びつけて理解されたことを示したが、正反応時間ではその理解が見られなかった。実験 2B では、再認課題の代わりに語彙性判断課題を用いて追従実験を行ったところ、実験 2A の正反応率で見られていた major topic と subtopic のつながりに対する理解が見られなくなった。実験 2A, 2B の結果から、読解中にテキスト情報を結びつけて理解することの困難性と、読後タスクの存在がトピック構造の理解に影響する可能性が示唆された。

研究 2 は 2 つの実験 (実験 3, 4) から構成され、トピック構造の理解に対する教育的介入の効果を検証した。実験 3 では読解教示の効果を検証するため、理解質問に解答する目的で読解するように指示する通常条件と、major topic, subtopic のアウトラインを作成する目的で読解する読解教示を与えた教示条件を設けた。また、トピック構造の理解プロセスと記憶を測定するため、テキストにおける major topic の明示性を操作した。subtopic の読解時間・再生率の結果から、英語学習者が通常の読解中にトピック構造を理解して読解後の記憶に表象することが困難であり、アウトライン教示の効果も顕著には見られないことが示された。トピック構造の記憶に関しては実験 1 と異なる結果となったが、その一因として実験 1 では major topic を手がかりとして提示したことがあげられる。実験 4 では、読解中に実際にタスクに取り組ませることで、トピック構造の理解が促されるかを検証した。実験では通常条件と読解時にアウトラインを作成するタスク条件を設け、読解時の発話プロトコル、作成されたアウトライン、再生プロトコルを協力者の英文読解熟達度とタスク有無の観点から比較した。その結果、通常条件ではトピック構造を理解する困難性が見られたが、熟達度上位群ではアウトライン作成の効果が見られた。具体的には、主にテキストを一通り読解した後にアウトライン作成に取り組み、major topic, subtopic の選択的な再読やトピック構造の特定が行われていた。また、上位群はテキストのトピック構造を反映したアウトラインや再生プロトコルを多く産出し、トピック構造の理解や記憶が促されていた。一方、これらの効果は熟達度下位群では見られなかった。

5 つの実験から以下の 3 点がまとめられている。第一に、トピック構造に関連する情報の手がかりや読解タスクなどがない場合、英語学習者が読解中にトピック構造を理解して読解後のテキスト記憶に表象することは困難であった。第二に、アウトライン作成の読解教示を与えただけではトピック構造の理解は促されなかったが、熟達度上位群はテキストを読解して実際にアウトラインを作成することで、トピック構造の理解や記憶が促された。第三に、熟達度下位群は教育的介入に沿って認知プロセスを変化させることに困難を抱えており、トピック構造の理解促進にはさらなるサポートが求められることが示唆された。そして、英語学習者のレベルに応じたテキスト選定やトピック構造の理解を促す教師のサポートなど、教育的示唆が述べられている。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、日本人英語学習者の説明文読解を対象として、文章全体の首尾一貫した理解と教育的介入の効果を検証している。認知言語学的・心理言語学的なアプローチから英語学習者の読解メカニズムを実証的に研究しており、研究成果は関連領域の発展に貢献することが期待される。本論文の優れた点としては、以下の３点があげられる。

第一に、先行研究では英語学習者がパラグラフの明示・非明示の subtopic や文章全体の明示的な major topic を個々に理解はするが、文章全体を要約した非明示の major topic を推論することが困難であることが示されている。しかし、第二言語読解において、文章中に明示された major topic, subtopic の階層的なつながりを理解することが困難であることが予想されるにも関わらず、これを検証した研究は少ない。本論文では、外国語として英語を学ぶ学習者が、単語や文の処理にかかる認知負荷のために上位レベル処理が困難であることを踏まえて実証研究を行っている。

第二に、本論文では読解中にトピック構造を理解するプロセスや読解後の記憶を慎重に議論している。各実験では、読解中の理解プロセス (再認課題、語彙性判断課題、読解時間、思考発話法) と読解後の記憶 (再生率の量的分析、再生プロトコルに反映されるトピック構造の質的分析) を複数の手法・分析で検証し、確かな議論がなされている。実験 2A と実験 2B ではプライミング課題、実験 1 と実験 3 では再生課題の結果が異なっており、それぞれ読後タスクや手がかりの存在がトピック構造の理解に影響した可能性が示唆されている。これらの実験間の相違は、同一のテーマを多面的に検証する重要性を示唆している。

第三に、本論文は各実験で協力者の英文読解熟達度を要因として考慮しており、能力の記述が具体的に行われている。実験では英検過去問から作成された同一の英文読解熟達度テストが使用され、その結果からどの実験でもおおよそ上位群は英検 2 級程度、下位群は英検 2 級未満に相当すると推定している。このように、英文読解熟達度を一貫することで、実験間で結果を比較しやすくなるとともに、実験 4 でアウトライン作成の効果が熟達度上下群で異なるなど教育的に重要な結果も得られている。

第四に、トピック構造の理解促進を目的とした教育的介入 (読解教示、タスク) の効果にも焦点が当てられており、本論文では教育現場への応用を意識した実践的な検証が行われている。英語学習者対象の先行研究では、テキスト理解を促す方法として主に読解教示の効果が検証されてきたが、母語話者ほど安定した効果は得られていない。その一因として、学習者の言語熟達度に対して介入の認知負荷が高かった可能性に加え、介入の程度が不十分であった可能性も考えられる。そのため、読解教示に加えて実際にタスクに取り組むことの効果を調査した本研究は、教育的に意義のあるものである。

ただし、本論文には以下のように複数の限界点が見られる。第一に、協力者に関し、複数の実験でサンプルサイズが限られており、結果の一般化可能性の面で制限がある。加えて、本研究は大学生や大学生を対象としているが、今後は中学生や高校生といった他の学習者層も含め、より多くの多様な協力者を対象とする必要がある。また、本論文では一貫して英文読解熟達度を要因としたことで実験間の比較がしやすくなっているが、読解の上位レベル処理では下位処理の熟達度や認知資源の容量など、他の個人差による影響も大きいことが示唆されている。今後はこれらの要因も考慮に入れたより包括的な検証が望まれる。第二に、本論文では教育的介入の効果を検証したが、確認されたのは限定的な効果にとどまった。実験 4 において、熟達度上位群はテキストを一通り読み終えた後にアウトラインを作成し、その際にトピック構造の理解が促されたが、厳密に言えば読解時におけるトピック構造の理解は促されていなかった。また、下位群はアウトライン作成に取り組んだものの、major topic, subtopic の階層的なつながりを十分に理解できず、タスクの顕著な効果が見られなかった。今後の検証では、読解中におけるトピック構造のスムーズな理解や、熟達度が低い英語学習者のサポートを念頭に置いて教育的介入の効果を検証することが求められる。こうした課題はあるものの、本論文は日本人英語学習者の読解におけるトピック構造表象の構築や教育的介入に関わる新たな知見をもたらし、確かな理論と研究手法に基づき議論を行っていると高く評価できる。

２　最終試験

平成 30 年 1 月 26 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。